



ピクタインダカン

(おきみがりにぼし)

第 33 号

発行日 2021年11月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

ぼんぼこな夜

寂として暗みゆく

仲秋の空

黒い木木の枝のあいだに

月がうかんでいる

アイボリーの明月は

ぼんぼこ山を照らし

やがて星が星を誘いあわせ

無数の瞳がいつせいにまたたく

メステイン^{*}からは牡蠣飯の匂い

焼き網のうえで肢体をくねらせる魚

烟り臭さが辺りに深くひろがる

ランタンの灯にゆらめくキツネの太い尻尾

オレンジ色のテントの頭上にかがやく

広大な空をわたる星と満ちる月

*アルミ製の箱型の飯ごう

蓮物語

夏

東の空が明るむころ

わたしは目覚め

光が生まれる宇宙そらを仰ぎ

ゆつくりと

心をひらいてゆく

お堀をわたる風は

やさしく頬をなで

水の底には

根茎の穏やかな世界

わたしは

生命いのちのかがやきを

そつと放つ

昼近く

お堀を埋めつくす

大輪の花々に

美をたたえる言葉

淡紅色うすべにいろの夢

を

なげかける

人びと

きらめく陽光が

傍らを通りすぎると

わたしは眼を閉じ

蕾のなかへ

漂う香りの記憶をしまい込む

千秋公園に

夕闇がせまり

お堀を照らす灯りは

臉の裏の

小さな

焰

わたしは

くろい しずもる景色のなかで
平和な朝を待っている



森物語

灌木が寄りあうように密生している

蜘蛛の巣が風にゆれている

網のなかには

翅を広げたままの蛾

朽ちかけた

老木が

芯をくり抜かれて

立っついて

幹には

カビ臭い

ナメクジ

雷の直撃を受けたらしい巨樹は

チェーンソーで伐られ

切り立った崖の背に棄てられている

太い迷路のような根

幾股にも裂かれた幹

樹陰の映る沼をすぎ

草いきれのする藪をぬけ

崩れかかった山路にさしかかる

路肩には

今にも転げ落ちそうな岩が

うづくまつている

清潔な風の指先に触れると

森との距離が縮まり

清澄さに満ちた

みどりが心に沁みる

時折

雉の金切り声の横を

すばやく飛ぶ

オニヤンマの眼差しの中には

生きた年輪の厚み
白く肉質のもの

山頂から
見下ろすと

おびただしい針葉樹が群がる
藍碧の海

やがて

光が山の向こうへと隠れはじめると

樹々が落とす

黒い塊のような影が
ふくらむ

夜には

暗がりのかなたへ

駆けてゆく

星がみえる

徒然のエチュード 30

①

マダニに刺されて
赤く腫れている

でも

今日は

美容院の予定が入っているしな……

ビヨウイン

と

ビヨウイン

どっちが大事なの？

と娘

②

山の中は

風もなく

蒸し風呂状態

体に熱気がこもり

したたり落ちる

玉の汗

オニヤンマも

力なく

飛んでいる

蝉が鳴いている

かなりのボルテージ

声をたどると

枝にとまっている

ジィ〜 ジィ〜

鳴き声を

スマホで録画して

聞かせたところ

ジィ〜

ながなぎどり
長鳴鶏も顔負けの

一息で十二秒

スマホの声を

ライバルだと思って

鳴いているの

かな？

③ 突然のメール

「失恋しました」

エッ！

「いやだ〜

間違えたわ！

失礼しました」

④

潟湖で

バードウォッチング

一羽 二羽 三羽……

自宅の窓から

人間ウォッチング

派手 地味 野暮ったい……

と

難癖をつける

男

⑤

散歩中

ぎよつとして

立ち止まる

小屋の陳列棚に

食パンがずらりと並んでいる

横から見ると

紫の耳がいっぱい咲いている

はじめて見る光景

よく見たら

キクラゲだ！

まさに

字のとおり

木耳

【詩の勉強会】

去る十月三日(日)、あきた文学資料館において、「第九回 ピッタの会」を開催した。

講師には成田豊人氏をお迎えし、演題は「詩『日光写真』が出来るまで」。

参加者は講師を入れて十二名。内、はじめての参加者は三名であった。

*

成田氏には勉強会の講師として、三回登場していただいた。二〇一七年の「第二回 ピッタの会」、二〇一八年の第四回には鼎談のコーディネーターとして、そして、今回の勉強会である。

〈私如きが講師を務めること自体恐れ多く悩みました。〉とのメール。なんと慎み深く控えめなお言葉——。

講演料を払えるわけでもなく、誠にあつかましいお願いにも関わらず、これまでの講師の皆さまは、〈教えることは自分の勉強になるから〉と、一様にご快諾してくださった。感謝の念にたえない。

身近に詩の先輩がいらつしやる幸せ。コロナ禍においても、参加者とともに学ぶことができることは、ありがたいことである。少しでも詩を理解し、良い作品を生みだすことが恩返しになるのではないかと、手前勝手な理屈をつけている。

●講演内容

- ① 挨拶
- ② 講師紹介
- ③ 講演
- ④ 自己紹介
- ⑤ 感想・質疑応答

● アンケートより

・ 成田豊人様 今日はお天気が良いけど、遠路お疲れさまでした。ご自分の作品を参加者の前に晒してのお話、その勇氣に拍手です。

・ 講師の先生の詩に対する熱い思いが伝わって、詩に対する思いがますます強くなるばかりです。今後は体調と天候の具合を見ながら参加させていただく機会があったらと思います。

・ しばらく振りで皆様とお会い出来、とても嬉しかったです。日光写真の詩は自分の子供の頃を思い出しました。中でも「子供達の心の中に潜んでいたもの、澄んだ眼の裏に映っていたもの、一瞬でいいから確かめてみたい……」、とても良かったと思います。年月の表現があざやかだと思いました。気をつけていること……三点は、心に残りました。

・ 来て良かったです。詩と作文の違いが、分かっています。ノスタルジックにおぼれてばかりではダメと聞き、ハツとしました。学ぶことの楽しさを知りました。

・ 「日光写真」ああ、そういう子ども頃あったと、なつかしい気持ち、それこそノスタルジックにひたっていました。私の故郷、西馬音内の学校の裏を流れる雄物川、羽後鉄道のチンチン電車、ほんとにそっくりで、同じ時代を生きて来た者だからでしょう。私もこの成田先生の詩を手本に、まねして書いてみようかなんて思った今日です。

・ 米代川の詩情、成田為三の曲が生まれる土地の風情にひたりました。書き続けるすごさにも感動です。

・ 自分史を作ったり、すべて文章ですので、なかなか詩を書くところまでは出来ません。まず、あまりにも用事がありすぎて、それに年のせいで病院に行ったり、何か一人になりた
い気持ちです。でも、参加して良かったです。

・ 一つの詩が出来るまでというテーマが良いと思いました。言い出した本人が講師とは、おもしろかったです。質疑が参考になりました。



【あとがき】

*

今年に入り、いろんなことが立て続けに起き、堪忍の限界を超えつつあった。

たまりかねた私は、平日は詩の小部屋にこもりイマージュを膨らませ、詩の世界で気を紛らわせた。

週末はできる限り自然と親しんだ。青空に両手をひろげ立つ樹々、不断に流れる谷川、ひっそりと咲くギンリョウソウ、一心に鳴きつづける蝉。からだを使い、こころを遊ばせ、解放感に浸った。この生活のサイクルは、難事をなんとか切りぬけるのに効いた。少しずつではあるがスイッチの切り替えができるようになった。

みどりの小部屋には、原稿用紙に書きとめられた、めくるめく夏の思い出がいっぱい。

友人と半世紀ぶりに会った。長い年月の空白は、互いの近況や学生時代の話で難なく埋まった。

彼女は九十六歳のお母様の介護に専念している様子。生活の輪郭が見えるにつけ、頑張り屋の彼女の人となりが見え、社会が変容するなかで変わらぬ友情に心からうれしく思った。

忙しいなか、手作りの漬物、栗の渋皮煮、ピーマン味噌などを持参し、喜ばせてくれた。へわたしは作れないわ」との言葉に、彼女は「詩があるじゃないの」と。

積もる話に時を忘れ、十代に戻った私たちは、再会を期して別れた。

帰宅後、「人生の後半、幸せに生きようね」と、メールをいただいた。素敵な友情に乾杯。なんだか力が湧いてきた。

